令和5年度 学校評価報告

次代を拓く ”ONO Progress” ～人間力を育む9つの力～

重点事項：学力の向上による進路支援

努力事項	No.	具体的取り組み	具体的な行事等	探究心	レジリエンス	課題解決力	俯瞰力	突破力	発信力	多様性	共創力	批判的思考力	総合評価	成果	課題	改善策等	主担当
				自己評価 評価 （A：よく出来た B：出来た C：あまり出来なかった D:出来なかった） ※ 9つの力の評価を空白の欄に記入してください。													
授業力の向上 教員が自らの授業力を向上させるために日々研鑽に努め、生徒が満足できる魅力ある授業を行い、生徒の学力向上を図る。	1	教科担当者が更なる連携を図り、効果的な授業を実施し、適切な試験問題作成とその結果分析によって生徒の実態把握を行い、授業力の向上に努める。	公開授業、研究授業、教科会	B	B	B					A	A	B	・一部の授業で習熟度別授業を取り入れている。生徒の学力に対応した授業を実施した。 ・７月と１２月に学年ごとに生活実態及び授業に関するアンケートを取り、学年毎の集計結果を共有した。	・学力差の大きい生徒集団であるため、効果的な教材や授業内容、試験問題などについて、より一層の工夫が必要である。 ・ICT機器の効果的な活用方法の理解と実践を推進する。	・教科や学年の枠をこえて学校全体で問題意識を共有する場を設ける。 ・生徒の動向に注視し、各経担当者と進路指導部との連携を密にしながら、進路に対する目標と意識を高く持ち、学習に積極的に取り組む姿勢を養う。	教務
	2	公開授業や研究授業をはじめ、授業評価を通して授業改善に努める。	教科会、各種研修	B	B	B					A	A	B	・６月、９月、１１月に公開授業週間を行った。毎回、研究授業を設定して、教科の枠を超えての情報交換を行った。 ・「ひょうご学力向上研究事業」に取り組み。研究授業や研究協議に取り組んだ。	・研究授業の参加者も同じ教科内での参加が大半である。 ・時間割の中に組まれている教科会議が教育課程の検討などの審議事項に使われていて、各教科内での研修として活用していることが少ない。	・公開授業週間だけでなく、授業の公開や情報交換等を積極的に行う。 ・教科会議の時間を研修等の時間として活用する。	教務
生徒の学力向上 生徒が授業に主体的に参加して、学ぶことの楽しさを体感し、自らの潜在的な力を向上させる。	3	生徒一人ひとりの進路実現を目指して、より適切な教育課程の編成を行う。	教育課程委員会、教科会	A	A	A					A	A	A	・新学習指導要領に基づいたカリキュラムの見直しを行った。 ・クラス数減や職員数減に伴い複雑になったカリキュラムの見直しを行った。	・科学探究科、ビジネス探究科は専門科目の履修制限もあり、特色ある教育活動にも取り組んでいる。その中で大学入学共通テストにおいては教科数が増えた。このことにどのように対応していくかが課題である。 ・非常勤講師の多さ、同時展開授業や使用教室の制限など、制約条件がかなり多い中で時間割変更の依頼も多い。	・学校或いは各学科の方向性を学校全体で共有することが重要である。その中で「出来る事」と「出来ない事」或いは「取り組むべき事」と「そうで無い事」を整理する。	教務
	4	朝の学習や補習、面談を通して、学力不振者への対応と学力上位者のさらなる学力の伸長を図る。	朝学の継続実施			A	A						A	・「朝の学習」は、各曜日ごとに各教科を配当し、共通テストを念頭においた年間計画に基づき、基礎基本の定着と落ち着いた雰囲気で授業に臨むことが概ねできたように思われる。	・朝の学習開始時刻に教室に入る生徒が見られる。比較的学校に近い居住区の生徒にその傾向がよく見られ、時間に余裕を持って登校させることが必要である。	・担任や学年団が朝の教室の様子を巡回したり、個々の生徒の生活状況を面談等で把握しながら保護者と連携して改善を促す。	３学年
			定期考査前の指名補習			A	B						B	・「定期考査前の指名補習」は、各教科担当者が学力不振者に対して具体的に指示を出し、学習状況を確認しながら取り組ませることができた。	・定期考査前の限られた期間では、十分な対応ができにくい。	・学力不振者に対しては、不振の原因を探りつつ、定期考査前の単発的な指導に終わらないよう、日常的に継続した指導を行う。	
			進路希望別放課後セミナー開催（６月以降）			A	A	A					A	・総体後から平日の放課後補習、長期休業中の夏季セミナーを生徒が希望に応じて選択できるように開講し、基本事項の定着と応用実践力の育成に向けて学習意欲を高めることができた。	・補習の狙いを明確にし、生徒とそれを共有する。 ・開講講座の種類と内容を精選する。	・目標を明確にして効果的な教材を準備する。 ・生徒の実態に合った講座を開講する。	
			朝学の継続実施			B	B						B	・各教科で短時間で取り組める教材を用意し、基本的事項の習得、確認に努めた。10分間ではあるが継続的に実施することで、効果的なものになった。	・開始時刻が守れていないことを指摘されることが多かった。	・開始時刻をしっかり守れるように指導する。	2学年
			定期考査前の指名補習			A	A						A	・学習に苦手意識を持つ生徒に対して、基礎基本に焦点を絞って指導した。指導を受けた生徒の多くは考査での得点向上が見られた。	個別指導が効果的ではあるが、人的・時間的な限度がある。	・学習につまづいている生徒の早期発見と、早めの指導をする。	
			夏季セミナー（夏季休業中）			A	A	A					A	通常の授業では扱わない発展的な内容を行う講座や、通常の授業を受ける前提となる基礎的事項を習得する講座など多様な講座を設定した。	教員の出張等が重なることも多く、講座を受け持つ教員の確保に苦労した部分がある。	・教科内、教科間での連携をより強化する。	
			朝学の実施			A	B						A	・定期的に面談を実施するとともに、随時生徒の相談に乗り、きめ細かく生徒に学習のアドバイスを行った。 ・スコラ手帳を活用して学習状況を俯瞰して見られるよう工夫した。 ・指名補習については定期考査における基本ポイントを個別に指導し、自己肯定感を高める工夫をした。 ・朝学においては、国数英の基礎力向上と読書を実施して、基礎基本の徹底を図った。 ・夏季セミナーでは授業を補うような形で講座を開き、生徒の学力向上に努めた。	・朝学の開始時刻に対する意識付けを行う。 ・スコラ手帳の日々の記録の意識付けを行う。	・夏季セミナー後の長期休業中の家庭学習へのスムーズな移行を推進する。 ・自学(自分で学習内容を考える)への意識を高める。 ・朝学の開始時刻に対する意識付けにさらに努める。 ・スコラ手帳の記入を促進する。	1学年
			定期考査前の指名補習			A	A						A				
			夏季セミナー（夏季休業中）			A	A	A					A				
進路指導力の向上 生徒一人一人の進路実現を支援できるよう、教員がそれぞれの立場できめ細やかで系統的な進路指導を行なう力を高め、個々の教員のもつ技量の共有にも努める。	5	進路HRや「第一志望宣言」、個人面談などを通して進路実現に向けての生徒の意欲を高める。	「第一志望校宣言」に基づく主任面談	A					A			A	A	・クラス担任が随時行う面談に並行しながら実施し、担任指導を後押しするかたちで生徒の進路に向かう思いを聞き、励ますことができた。	・生き方HRや進路HRなどとの日程と会場の調整が必要である。	・進路指導部との連携を継続する。 ・進路HRとつながりる機会で設定する。	３学年
			進路講演会（６月）			A		A				A	A	・入試環境、一年間の受験の流れ、第一志望校に合格するために大切なこと、学習に向かう姿勢などについて駿台予備校に講師を依頼し、講演会を開催した。進路実現に向かう生徒に受験生としての心構えを固めさせることができた。			
			進路講演会（１０月）			A		A				A	A	・国公立大学の概況、受験生としての生活、模試の活用法など、河合塾講師に講演を依頼して講演会を開催し、進路実現を目指す生徒の意識を高めることができた。			
			進路HRを通して「第一志望宣言」の完成に向かう	A				B	A					・進路ＨＲ、担任との面談等を通して第一志望宣言を完成させつつある。生徒が自分の目標を設定する過程を通して、どのように社会で生きていきたいのか考えることができた。	・現時点で第一志望を設定することを難しく感じる生徒もいる。	・第一志望を設定すること自体がねらいではなく、設定する過程で自分の興味関心や将来やってみたいことを考えることにねらいがあることを指導した。	2学年
			大学出張講義（６月）	A			A			A				・大学の教員から講義を受け、専門分野を深く学ぶことに対する興味関心を持つことができた。積極的に質問する姿が見られた。	・国公立大学の講座が多くありがたい一方で、ビジネス探究科の多くの生徒が目標とする関西圏の私立大学の講座があればなおありがたい。	・可能であれば、私立大学の講座開設を希望する。	
			進路講演会（9月･2月予定）			B		A				A		・予備校の方に来校いただき、新課程入試に向かう心構えをご教授いただき、生徒たちは具体的な入試のイメージを持つことができた。	・特になし	・特になし。	
			生き方討議（４月）	A			A		A	A	A	A	A	・3年間の「小野高校での学び」を意識させ、各クラスでグループを作り、意見交換をした。非常に活発に意見を出し合い、クラス目標作りに向けて、自分たちなりの答えを発表した。発表会では他のクラスからも質問がたくさん出るなど、他者への関心も生活するうえで大切なことであると学ぶことができた。 ・教育実習生を囲む会では、実習生の語る大学生活や高校生活について熱心に聞き入っていた。大学生活への興味関心が高まったという感想が多くあった。 ・職業講演会ではざまざまな分野の職業人から仕事の面白さ、難しさについて語って頂き、働くということに対する意識が高まった。	・生き方討議を含む集団宿泊訓練は生徒たちは意欲的に取り組んでいた。３月末からの準備だったので非常に慌ただしかった。	・集団宿泊訓練内の生き方討議は、前年度から準備に取りかかることができれば負担が軽減できると考える。	1学年
			教育実習生を囲む会（６月）	A						A			A				
			職業講演会（９月）	A			A			A		A	A				
	6	有益な進路データの蓄積を行ない、適切な時期に各学年に提供する。２学年、３学年で行う進路検討会で情報の共有を図り、進路指導に役立てる。各大学の入試科目等の変更点、共通テストや個別試験の問題分析に関する情報を提供する。補習の各講座内容が進路実現に結びつくよう、より一層の工夫と改善を行う。３年生の小論文・面接試験に対する個別指導について、全職員の協力を仰ぎ、全体の組織的指導力を高める。	進路検討会(２年/３年)											・進路データについては例年通り模試の結果分析や共通テスト結果分析、さらに各業者や各大学からの情報等を適切な時期に学年に提供し、必要に応じて進路指導部会での共通理解を図ってきた。 ・進路検討会については学年の意思を尊重た会の進行、資料作りを心がけた。第３学年の進路検討会（計３回）については進路指導部専任が進行役を務め、限られた時間の中ではあったが意見交換が活発に行われ、有益なものとなった。 ・夏季セミナーについては昨年度の反省を踏まえ、各学年の実態に合わせて内容を工夫し、進路実現につながることを意識をした講座が増えた。 ・３年生の小論文・面接指導については指導力向上を促してきた。全職員の協力を得て、進めている。	・各教科ごとに模試の分析や入試問題の検討を行い、教材選択や指導方法の研究をもっと進めていけるように進路指導部として十分に促せていない。効果的な教科指導につながるデータ分析も必要。 ・夏季セミナーをより効果的に行う方策を検討することが必要。 ・小論文指導の研修会への参加が難しい。	・模試データや入試問題分析を進路指導部会や各教科会でおこなう機会を設定する。 ・進路検討会の資料については、次年度の共通テスト改変に伴い、その資料フォーマットも変更の可能性があるので、早期にその作成方法などを検討する必要がある。 ・校内での小論文指導研修会の開催を考える。	進路指導
			夏季セミナー（夏季休業中）	B		A	A	A				B	A				
			小論文・面接試験指導														
	7	卒業後の進路と類型の選択の結びつきを強め、ビジネスに関する基礎的な知識の定着とそれをベースにした応用力を身につける。専門科目の学びに対する積極的な姿勢とビジネス実践力の向上を図るために、きめ細かな指導を行う。また、多くの入試形態に対応できるよう全商主催検定1級の取得率の向上に努めるとともに、社会との結びつきを強めた実践的課題研究活動に取り組む。		A	A	A		B				A	A	・学科改変後2回目の卒業生となる。専門学科における専門性の理解や類型選択を通して自己の興味・関心の在り様を深めた学びの中で、各自が目指す進路を見極め、こだわりを持った進路の実現への取り組みができたと感じる。生徒各自が、主体的に自分の未来を見つめ、適性や特技を生かして、様々な入試方法で進路の実現に臨み、結果を出している。。	・新教育課程および入試科目の変更、また検定の改廃に対応した教育カリキュラムについて教科および教育課程委員会で検討し、選択科目等の配置を行った。	・文科省が定める新教育課程上の学科科目だけでなく、学校設定科目および選択科目の適切な設置による教育カリキュラムの見直しを進めることができた。	ビジネス探究科
ＳＳＨ事業の推進 ＳＳＨ指定校として、５年間を見据えた計画のもとで、科学技術系人材の育成事業の充実をはかる。	8	ＳＳＨ指定4年間の取り組みを改善し、また、中間評価における指摘事項を踏まえ、より充実した取り組みを展開する。海外の高校との連携や科学英語の推進、ＳＳＨ事業評価の方法の改善と充実などを目指す。	SSH運営指導委員会中間評価など	A	A	A		B				B	A	・メタ認知ルーブリックを活用し、生徒の変容を客観的に検証することができるようになった。 ・探究活動に必要な資質の育成に関する3年間を通した一連のカリキュラムを構築することができた。 ・SSH海外研修を実施し、科学技術や国際理解の点で成果を上げることができた。また、海外実習を企画、実施するためのノウハウを学ぶことができた。	・SSｈ事業の評価をより体系立てて組織的に実施することが求められる。評価の方法の見直しと改善、データの蓄積と活用を円滑に行い、評価が日常的に行われる状態にしたい。 ・科学探究科を中心としたSSH事業の展開を、普通科やビジネス探究科にも拡大し、幅広い科学技術系人材の育成を行いたい。	・評価に用いる質問紙の内容の精選、メタ認知ルーブリックの改善、回収したデータを生徒個人と紐づけて蓄積、活用できるしくみの構築などに取り組む。 ・問題解決型実習を今以上に増やし、生徒の探究に向かう意欲を高めるなど、カリキュラムの改善を継続して進める。	SSH探究推進
生徒が自己の未来をデザインできる力を育てるキャリア教育の充実 生徒が自身の適性を見極め、自らの意思と責任で主体的に進路を選択できる能力や態度を育成する。	9	進路HRや進路行事を通して、社会の実態や働く意義を学び、職業観を育てる。さらに自身の適性を見極め、将来の社会貢献のあり方を考え、キャリアデザインを実践する。それらを実現するための方策を考え、それを実行しようとする態度を育てる。	職業講演会（１年９月）	A			A		B				A	・職業講演会（１年）と大学出張講義（２年）の進路行事を通して、各生徒が社会や職業、さらには大学での学問領域やその奥深さを知る機会となり、興味の幅を広げた生徒も多い。それぞれの進路意識の高揚に役立った。 ・ビジネス探究科コミュニティデザイン類型の希望生徒を中心に２年生約５０名が参加した。コロナ禍後３年ぶりの実施となったが、それぞれ実りある実習となり、進路選択や社会貢献についての意識を高めた。	・１年生の職業講演会では、新しい講師の開拓に労を使うが、学年との協力でマンネリ化しないように心がけなければならない。 ・２年生の大学出張講義では、国公立大学に依頼することが多いが、ビジネス探究科の生徒から人気がある関関同立大へも講師依頼をしてほしいと学年から要望があったが、日程の関係で叶わなかった。 ・意義のある行事であることに議論の余地はないが、２年生の８月実施ということで、部活動との関係が難しい場面もあった。ビジネス探究科独自の様々な行事があり、行事の精選が必要と考える。	・職業講演会、大学出張講義共に、講師の方の一方通行の講義になってしまいがちなので、もっとインタラクティブに行う工夫が必要だと考える。できる限り事前に講演内容を伺って、生徒に「予習」をさせて、当日には質疑応答をもっと活発にするよう考えたい。 ・インターンシップについては、２年で就職（公務員を含む）を考えている生徒には原則勧めていきたいが、進学希望の生徒は大学訪問等の他の学校外行事への参加を奨励する。	進路指導
			大学出張講義（２年６月）	A					B			B	B				
			インターンシップ（２年８月）		A	B					A		A				

重点事項：豊かな人間性を持った生徒の育成

努力事項	No.	具体的取り組み	具体的な行事等	自己評価 評価（A:よく出来た B:出来た C:あまり出来なかった D:出来なかった） ※網掛け箇所に記入する。 探究心	レジリエンス	課題解決力	俯瞰力	突破力	発信力	多様性	共創力	批判的思考力	総合評価	成果	課題	改善策等	主担当
		生活３原則を徹底することで生徒の基本的な生活習慣の確立に努める。	風紀委員会				B		B		B		B	・8時10分の朝学開始の時間に着席できていない生徒が増加しており、評議委員会等で呼びかけたが改善は見られなかった。 ・挨拶運動を校内外で実施した。	・遅刻者の状況に応じた指導が必要で、一律に指導することは有効ではない。生徒指導部専任の教員と学年・担任との情報交換が不可欠である。 ・教師も挨拶を意識し、生活三原則の徹底をする必要がある。	・遅刻の多い生徒を学年と協力して個別指導を行う。また、不登校傾向の生徒については、家庭と医療機関との連携も必要である。 ・SHRや授業などで色々な教師からマナー向上や生活三原則についての話をする。	生徒指導
	11	部活動の活性化を推進しつつ、効率的な練習計画によって学習との両立を図る。	マナーアップ運動	A			B		A		A		A	・多くの部活動が近畿大会や全国大会に出場し、成果を上げることができた。	・生徒は学習と部活動の両立の難しさを感じており、時間の使い方に課題がある。	・部顧問・担任・教科担当の連携を強化し、学習時間を確保できるよう努める。 ・規律ある行動が取れる生徒の育成が望まれる。	生徒指導
	12	学校行事を通して、学校・学年やクラスへの帰属意識を高めるとともに、リーダーを育成する。	部活動	A	A	B							A	・全校生の９０%以上が部活動に所属している。学習と部活動を両立し、日々熱心に取りくみ、自主的な活動ができるようになっている。コロナの影響で活動方法を改善しノー部活動デーが徹底されている。	・より充実した活動となるように活動時間や内容の改善に努める必要があるのではないか。	・生徒の自主性だけではなく、各部顧問がより積極的に部員と関わることで部活動を活性化させていく。	生徒指導
			新入生歓迎遠足		A				A		A		A	・3年生として各クラスが創意工夫をこらし、新入生の緊張を解きほぐすための楽しい時間を創り出すことができた。	・3年生ではクラスや学年で取り組む行事が最後になっていくが、連帯を感じることができる機会を大切にしていく。	・生徒たちが自主性やリーダーシップを発揮して活動することができるよう、限られた時間を計画的に運用するよう支援する。	３学年
			球技大会		A			A	A		A		A	・体育委員を中心に、クラスの個性を発揮して進めることができた。互いに協力し合い、各試合を存分に楽しむことができた。			
			体育大会		A			A			A		A	・応援リーダーを中心に、各人が責任感と協調性を持って取り組み、最終学年として溌剌とした演技を行った。学年の団結も一層深まった。			
			新入生歓迎遠足		A				A		A		A	・１年生を親切にリードする姿に成長を感じた。３年生の後ろ姿を見て来年度自分たちが主体となったときの構想を練っているようであった。	・特になし	・特になし	2学年
			球技大会		A			A	A		A		A	・各種目において一生懸命に取り組む姿が見られた。また、生徒会執行部を中心として運営にも尽力した。	・近年、ますます気温が上昇しており、熱中症対策がこれまで以上に必要になってくる。	・実施時期を検討する。	
			体育大会		A			A			A		A	・応援合戦においては、ラップのリズムを取り入れた斬新な趣向の演技を見せた。リーダーを中心に学年が一体となった充実した演技であった。	・特になし	・特になし	
			修学旅行														
			集団宿泊訓練	A	A	B	B		A	A	A	B	A	・集団宿泊訓練の実施は4年ぶりであった。コロナ前の取り決めもあり、バスで行き帰りになった。コロナ過の体力低下もあり、プログラムに集中することを思うとよかったと思う。 ・新入生歓迎遠足では、上級生が新入生を上手にリードしてくれたので、各班ともに和やかな雰囲気でゲーム等を楽しんでいた。 ・体育大会では応援合戦において学年演技を行った。人数制限の中、リーダーを中心に短期間の練習であったが完成度の高い演技を見せた。	・１年４月の行事が多いように感じた。授業時数の確保が望まれる。	・集団宿泊訓練に至るまでのオリエンテーションもあり4月当初の学年行事が多い。１年当初の行事の精選や職員間のフォロワー体制の構築、3月からの準備等の実施を行う。	１学年
			新入生歓迎遠足		B					A	A		A				
			体育大会		A			A		B	A		A				
ボランティア精神の滋養 奉仕活動に積極的に参加することで、ボランティア精神の滋養を図るとともに、地域との連携を深め、地域社会から信頼される生徒を育成する。	13	高齢者福祉施設への訪問、幼稚園・小学校・中学校との交流、地域の祭・イベント参加など「高校生ふるさと貢献・活性化事業」に積極的に取り組むことを通して、地域とともに歩む学校づくりを進め、地域との信頼関係を確立するとともに、関心をもって地域課題等の理解に努め、地域への愛着や誇りを育む教育に取り組む。	ふるさと貢献活動 ふるさと活性化活動		B	A		A			A	B	A	・生徒会・運動部・文化部・ビジネス探究科の生徒を中心に、通学路のクリーンキャンペーンの実施、地元社会福祉協議会・国際交流協会・商店街・老人福祉施設・近隣の小学校・幼稚園などとの交流、あるいは地域のイベント等への参加を通して、「地域での人とのつながりの再生」や「自治体や企業等との協働による地域貢献活動」など有意義で充実した取り組みを行うことができた。	・地域との交流活動を、特定の運動部・文化部の活動から学校全体の取り組みへと発展させるとともに、地域の多様な課題に対応した「ふるさと貢献・活性化」のあり方について再考する。	・地域との交流活動の内容や日程について、積極的な情報収集を行い、関係団体との連絡調整をより充実させ、有効な実施計画を立て参加団体の拡大を図る。	総務
	14	学校周辺の清掃活動を実施することで、奉仕精神を高める。	クリーンキャンペーン	A		A					A		A	・年２回（6月・12月）に開催したが、200名超える生徒が自主的に参加し、PTAと共に通学路をはじめ学校周辺の清掃活動を積極的に行うことができた。	・清掃箇所や内容をより充実させていきたい。清掃箇所と生徒数がアンバランスでなかには時間を持て余す生徒がいた。	・清掃活動を行う範囲をもう少し広げるなど、より充実した活動となるように内容を見直す。 ・行内の美化活動も行う。	生徒指導
人権教育の充実 人間尊重の精神を涵養し、日常生活において人権を尊ぶ態度を育てる。自らを見つめ、よりよい生き方を追求できる人間を育成する。	15	職員の人権意識を高めるとともに、各学年の「生き方ホームルーム」を充実させる。	生き方ＨＲの実施	A		B						A	A	・本校独自の人権学習アンケートの実施結果をもとに、中学校での取り組み内容等から生徒の実態を掌握できた。 ・学年ごとの学習テーマ（LGBTQなど）に沿って学年の人権教育担当者を中心に班別研修を計画・実施し、意見交換を行うことができた。 ・生徒の司会進行と討論形式の実施に生徒が主体的に取り組めた。	・「生き方ホームルーム」の実施にあたっては、学年の人権教育担当者に依存するところが大きい。	・部と学年が情報共有をしっかりと行う。 ・昨今の課題に対応した内容を実施する。	生徒指導
	16	海外の人々との交流を通して、文化や価値観の多様性を認識させるとともに、日本を再認識する機会とする。	オーストラリアの姉妹校Brentwood Secondary College、台湾、台中市のMingdao High School (明道中学)などとの交流	A		B			A	A		B	A	・第２０回オーストラリア国際交流派遣事業の実施　令和５年７月２６日（水）～８月９日（水）の１５日間、ブレントウッド・セカンダリーカレッジ（メルボルン近郊の本校姉妹校）を生徒２２名が訪問した。異文化理解を促し、国際貢献や平和に対する意識を高めるとともに、実用的な英語の運用能力を向上させることができた。 ・SSH海外研修の実施 令和５年１１月１８日（土）～２１日（火）の４日間、科学探究科2年の生徒8名（希望者）が台湾での研究を行った。陽明山国家公園での生態学実習、明道中学での科学分野における交流、TSMC博物館での実習。海岸での漂着物調査などに取り組んだ。亜熱帯多雨林の生態系や台湾での海岸ごみの状況を知ることができた、また、明道中学の生徒と課題研究の交流をすることができた。 ・ビジネス探究科の1年生がインバウンド向け旅行プランを英語で作成し、テイラーズ大学（マレーシア）の教員らに発表、質疑応答し、情報発信と英語によるコミュニケーション力の育成を促した。	・海外研修については、現地での研修内容をより充実した研修効果が大きいものがないか、情報収集と改善を図る。 ・英語を使ったコミュニケーションがより円滑に行われるようにしたい。言葉の壁が交流の充実の障壁になっている。 ・生徒の自己負担金を少なくし、多くの生徒に研究への門戸を開きたい。	・海外実習を行っている他校の事例を学び、効果が高い魅力的なプログラムになるよう改善を進める。 ・日常的に英語でのコミュニケーション能力を育成する実習を授業や特別なプログラムなどで実施することが考えられる。 ・SSH事業の予算や国際交流基金の運用などを検討し、今以上に支援する。	SSH探究推進
	17	生徒・保護者への教育相談の充実とともに、教職員にはカウンセリングマインド研修会を実施し、生徒に関する共通理解を図る。	カウンセリングマインド研修会 教育相談(年間24回) 学校保健委員会											・年間を通して、２名のスクールカウンセラーによる教育相談を実施し、保護者・学年・担任とも情報交換を丁寧に実施して、早期の対応ができるように努めた。	・保健活動を生徒が自主的・組織的に推進することへの取り組みが十分に行えず、教師側からの情報提供や指導が中心になってしまった。	・生徒会の保健委員会への情報提供・共有を行い、生徒が自主的に保健活動に取り組むことにより、活動への理解を深め、積極的に取り組めるように指導していく。	保健
	18	生徒に対し年３回、「いじめに関するアンケート」を実施し、いじめの早期発見・早期対応・未然防止に努める。												・アンケートの記述内容から生徒のいじめに対する考えを知ることができた。また、普段口に出して言えないような悩みを記入し、担任と話をする機会をつくることができた。	・生徒の「いじめはなくならない」「いじめられている方にも原因がある」などの意識を見直させる必要がある。 ・アンケート結果からだけではわからないことにも気をつけていかなければならない。 ・ＳＮＳ等でのいじめに対しての対応策を講じる必要がある。	・今年度も実施したが、担任や部活顧問や学年団だけで対応するのではなく生徒指導部等連携をとって組織として対応していくことがこれまで以上に必要である。	生徒指導
	19	いじめに対する職員研修を行い、全ての生徒が安心して学校生活を送ることができるよう、「学校いじめ基本方針」の徹底と教員の共通認識を図り、チームとして問題に立ち向かう体制を整える。	いじめアンケート			A						A	A	・２学期はじめに職員研修を実施、いじめ案件の詳しい内容や対策についての説明と、これからの対応について協議することができた。 ・本校でのいじめ対応チームについて確認し、学校として教師間協力の大切さを再認識した。	・生徒指導部が中心となって研修を行ったが、専門家に講義をお願いしたい。 ・研修会だけではなく、定期的に情報共有する機会も必要ではないかと考える。	・組織的に計画し、研修することが大切であることを再認識した。それによって、研修内容、講師の依頼などを協議して決定することができる。また、部会での定期的な情報交換を実施する。	生徒指導
			人権研修会			A		B			A		A				

重点事項：地域に信頼される学校づくり

努力事項	No.	具体的取り組み	具体的な行事等	自己評価 評価（A:よく出来た B:出来た C:あまり出来なかった D:出来なかった） ※網掛け箇所に記入する。 探究心	レジリエンス	課題解決力	俯瞰力	突破力	発信力	多様性	共創力	批判的思考力	総合評価	成果	課題	改善策等	主担当
情報発信の手段と内容の充実 公式ウェブサイト、学校公開等で最新の情報を保護者・地域住民等に発信し、理解と参画意識を醸成するとともに、地域に開かれた学校づくりを進める。	20	公式ウェブサイト及び学校・学科案内パンフレットを充実させるとともに、オープン・ハイスクールや学校公開の内容に創意工夫を加えていく。	オープン・ハイスクール						A		A		A	・学校案内や各種資料を準備し、中学校訪問、オープン・ハイスクール等で中学生やその保護者に配布することで、本校の特色や魅力をより効果的に発信することができた。 ・学校公開では、文化的・体育的行事、オープン・ハイスクール、課題研究・探究発表会、ＰＴＡとの共催行事などを計画した。昨年度まで と異なり、新型コロナウィルスの影響もほとんどなく、本校の魅力発信という所期の目的が概ね達成できた。	・オープン・ハイスクールを含む学校公開の実施や学校案内の配布等は、中学生の進路決定に大きな影響力を持つことを再認識し、学校として職員・生徒共々一体となった効果的な取り組みが必要とされる。	・「コロナ禍」から通常の学校生活が戻り、本校の教育環境の実態や生徒の活動の様子を公式ウェブサイトや学校・学科パンフレット、さらにオープン・ハイスクール等学校公開の場で、より一層効果的に発信する工夫が求められる。その際、本校生徒の活動を前面に押し出し、生徒の意見やアイデア、中学校側の要望などを取り入れながらさらなる充実を図る。また同時に「スクールポリシー」をどのように効果的に発信するかを工夫する。	総務
	21	中学校訪問やオープン・ハイスクール、中学校単位の学校説明会への参加などの機会を通して、中学生やその保護者、中学校教員等に対して、本校の特色・魅力を広く情報発信していく。	中学校訪問 オープン・ハイスクール						A		A		A	・学校案内や各種資料を中学校訪問やオープン・ハイスクール等で中学生やその保護者に配布することで、本校の特色や魅力をより効果的に発信することができた。 ・オープン・ハイスクールでは、体験授業・実習・実験、在校生との交流会（座談会）、部活動見学、食堂利用体験等、本校の教育資産を生徒の主体性を最大限に生かすことで、大きな成果と好評を得た。 ・公式ウェブサイトのリニューアルを行い、情報発信の視覚化が進み、本校の魅力がより迅速にかつ効果的に発信できた。	・地域の中学生生徒数の減少が続くなかで、旧北播学区以外への積極的な広報活動やＰＲ活動の充実が急務である。 ・特に、本校は3学科をかかえ、それぞれの指導方針や教育活動の実際、進路実績などについて、より一層幅広いかつきめ細かな情報発信が必要である。	・オープン・ハイスクールを含む学校公開をさらに魅力あるものにするための取り組みを工夫する。また、中学校訪問では出身中学校生徒の様子なども伝え、情報交換をさらにすすめたい。専門学科を含めて本校全体の指導方針や教育活動の実際、進路実績などについて、旧北播学区はもとより第３学区、さらには全県への情報発信をしていく。	総務
	22	「課題研究」では、実在する組織や人々との結びつきを強めた実践的活動に取り組み、研究の成果が”誰かの手助けになる”社会貢献活動を中心とする。「創造探究」では専門の学会や外部の発表会に生徒を積極的な参加を促し、成果の情報発信と普及を行う。また、取組の成果を蜻蛉祭やオープン・ハイスクールなどで発表し、中学生や保護者など外部へ情報発信する。	蜻蛉祭 課題研究発表会	A					A		B		B	・ビジネス探究科になってから初の通常の形での蜻蛉祭開催となったが、展示活動だけではなくイベントやワークショップ、物品販売などの実践的活動を行うことが出来た。今までの学びの成果を確認するとともに、企画を実行するための行動力を養うだけでなく、協働することの必要性を理解する取り組みとなった。	・ここ数年のコロナ禍による蜻蛉祭の縮小実施もあり、過去の流れを理解しないまま蜻蛉祭の場所の割り振りが行われこともあり、活動を行なう場所の割り当てが少なく、生徒が行おうとする企画内容に見合う場所の確保が難しかった。	・生徒指導部および生徒会執行部との連携をしっかりとるようにする。	ビジネス探究科
			課題研究 創造探究 オープン・ハイスクール　小野サイエンス教室	A					A		A		A	・6月には探究成果発表会（７６回生3年）、１１月には創造探究中間発表会（７７回生2年）を実施し、科学探究科の探究活動の成果を発表した。運営指導委員や教員などとの質疑応答を通して理解を深め、プレゼンカを向上させた。 ・オープン・ハイスクールでは座談会を通して在校生が様々な活動を積極的に情報発信した。 ・小野サイエンス教室では、4つの自然科学系部活動すべてが小学生やその保護者を相手に科学の面白さを発信することができた。	・SSH事業の取組や成果を外部に積極的に発信する取組が十分にはできなかった。本校webページの更新の頻度を高め、新しく魅力的な取組を継続的に発信したい。 ・課題研究の取り組み状況や研究の成果は班で比較するとばらつきがある。探究活動の取組の平均的なレベルを向上させたい。	・webページのレイアウトの見直し、更新する組織的な仕組みを見直す。 ・探究活動に関するノウハウの共有と見える化、指導教員の資質向上（研修、情報共有、共通理解）、メタ認知の活用などを検討する。	科学探究科
教職員の意識の高揚 学校公開の来校者アンケートや学校評価アンケートにより、課題を明確にして、教職員が各部署で改善に努める。	23	生徒・保護者・教員に対する学校評価アンケートを実施して自己点検を行い、日々の教育活動を活性化させる。												・次代を拓く”ONOProgress”における～人間力を育む９つの力～から、教育活動を通して、生徒にどの様な「力」の育成が期待できるかの目標を立て、その習得状況を具体的・段階的に評価することを継続した。	・昨年度からの取り組み”ONOProgress”、実際の活動状況から「９つの力」がどう育成されているのかの基準の設定と正確な指針に基づいた評価が出来ているのかが課題である。	・学校評価結果を各科、各部、学年等において検証し、来年度以降の教育活動の計画立案及び実施への改善に活かしていくことが不可欠である。	学校評価
	24	学期ごとに「生き方ホームルーム」の事前研修会を開き、効果的な授業方法の検討と人権意識の向上を図る。	生き方ホームルーム研修会											・人権教育に対する共通理解を図るため、各学年の人権教育担当者と専門部との連絡をとり、学年外の職員も含めて学年別の事前研修会をおこなった。意見交換を行い、学習内容について検討することができた。	・事前研修会が必ずしも全員参加での実施ではなかった。 担当者が大きな負担を感じることがないように、生き方ＨＲの計画立案に必要な資料の収集や整理を行う。 ・グループ討議での生徒の発言をしっかりと掌握し、フォローする。	・年度末の職員研修会でこの一年の取り組みを共有し、次年度の計画立案をより改善できるようにする。 ・さまざまな思いや事情を抱えた生徒がいることへの気付きと配慮への気配りを心掛ける。	生徒指導・人権
	25	学年の教員はもとより、教科担当者や部活動顧問を含めた職員間の連絡を密にして、生徒理解に努める。	学年会議											・毎週の学年会議で、生徒の情報を学年団で共有し、担任のHRにおける指導や授業担当者の教科指導に役立てることができた。 ・精神的に不安定な様子が見られたり、学習意欲の減退が見られる生徒に関しては、教員間の情報共有とともに保護者との連携を図り、教育相談の支援を受けながら対応することができた。	・受験生となり、不安を抱えて欠席がちになる生徒が出てきて、多くの教師が情報を共有しなければならないことがある。	・配慮すべき生徒や問題を抱えている生徒に対して、関わっている教員全体で情報交換・共通理解ができる場を設定する。 ・教育相談との連携を図れるように今後とも体制を維持する。	３学年
			学年会議											・毎週の学年会議において、配慮が必要な生徒について情報共有を行うことができた。また、年度当初には昨年度に引き続き拡大学年会議を開き、２年の授業を担当する教員で配慮を要する生徒についての状況共有を行った。	・毎週の学年会議によって学年団では情報共有がこまめにできるが、学年団以外の教員との情報共有の方法について検討する余地がある。	・生徒情報についてＩＣＴを活用して学校全体で共有する方法を考えてもよいと思う。	２学年
			学年会議											・毎週の学年会議において配慮の必要な生徒の情報の共有に努めた。また、年度当初には拡大学年会議を開催し、１学年授業担当者の間で、配慮の必要な生徒についての情報共有ができた。特別な配慮の必要な生徒が複数いたが、適切に対応できた。	・学年教員間での情報共有は毎週の学年会議で定期的にできたが、学校全体での共有が朝礼時での短時間の連絡となった。	・配慮の必要な生徒について、学校全体で継続的に共有できる仕組み作りが必要だ。	１学年
	26	服務管理システムを活用し、勤務時間の適正化を図る。												・教員が自分の出勤時間と退勤時間、月ごとの勤務時間を把握することで、健康管理、体調管理に繋げることができた。また、年休申請や、勤務時間の割り振り変更などの、手続きが簡単となった。特に、割り振り変更をとる教員が増えている。	・月の時間外勤務が80時間を超えている教員を把握しやすくなったが、出勤や退勤に伴う各自のパソコンのログオンやログオフが、毎日できていない教員がいる。	・残業の多い教員については、仕事が偏っていないか確認し、お互いに連携をとって声掛けしながら改善を続けていきたい。 ・産業医との面談を学期に１回実施したが、回数を増やし、心と体のケアを充実させる。。	教頭
	27	ノー部活動デー、ノー会議デー、ノー残業デーを積極的に実施する。												・ノー部活動デーについては、各部で曜日を設定し、適切に実施できている。 ・ノー会議デーを木曜日に設定し、推進した。	・ノー残業デー、定時退勤日については、部活動の指導、生徒との面談や補習、教材研究により、考査期間中以外は難しく定着していない。	・時間外勤務を減らすため業務支援員や部活動指導員の活用、年休や代休、割振り変更取得をさらに推進する。	教頭
安心・安全な学校づくり 生徒が安心して学校生活を送ることができるように、教職員が高い危機管理意識を持った安全な学校づくりを進める。	28	危機管理マニュアル等を活用した防災・危機管理意識を高め、適切な対応ができる実践的な能力の向上を図るとともに、防災教育を推進する。	第１回防災避難訓練 第２回防災訓練 防災研修会（職員向け）の実施	A	B	A					B		A	・避難所開設マニュアルを作成し、教職員の防災意識を高め、任務の役割を定めた。 防災避難訓練を実施し、①実際の火災を想定した敏速かつ安全な避難計画　②的確な避難行動③防災組織及び各係の仕事内容の確認と遂行を行った。 ・大規模地震を想定した訓練（登下校中での大地震発生を想定しての安否確認方法）を行った。 阪神淡路大震災追悼行事の実施や関連新聞記事の紹介などを通して防災意識の向上に努めた。 ・「EARTH職員」から防災研修参加報告を実施し、教職員の防災意識の向上に役立てた。	・災害時及び避難所開設における教職員間の役割分担や連携を確認するため、教職員の研修・訓練が必要である。 ・大規模地震を想定した訓練では、昨年度に比べて連絡体制の不具合は改善されたが、より一層実態に即したシステムの構築に努めたい。。	・小野市防災センターの指導を受け、学校に避難所が開設された場合を想定した教職員研修会を行う。 ・登下校中での大規模地震発生を想定して、本校の連絡網（ライデンスクール）とグーグルフォームを活用した安否確認システムをさらに充実・構築し、その訓練を計画する。 ・火災発生を想定した避難訓練では、より一層小野消防署の指導助言を仰ぐ計画を工夫する。	総務
	29	不審者情報の共有など、家庭・地域・関係機関と連携した危機管理体制を推進する。	生徒指導部会			A				B	A		A	・神姫バス内で女子生徒が痴漢に遭い、小野警察署に相談し、対策を行った。 ・SNS上でのトラブルが数件起こった。	・関係団体（警察・神姫バス、神戸電鉄等）との連携を普段から密にしておく必要がある。今回は継続的に起こらず大きなことにならなかった。	・毎年SNSの利用マナーについての講演会を行っているが、今後は関係機関とも協力してトラブルを未然に防げるように対策したい。	生徒指導
地域との連携 学校・家庭・地域が三位一体となって連携することにより、質の高い組織体となって、開かれた学校づくりに邁進する。	30	第２学年の希望者を対象にインターンシップを実施し、地域社会との連携を図り、生徒の社会貢献に対する意欲と責任感を醸成する。	インターンシップ		A	B					A		A	・地域の事業所からは快く生徒を受け入れていただき、参加生徒の取り組み状況も全体的に好評で、生徒自身も地域社会への課題や貢献について考える好機となった。	・インターンシップの意義は認めるものの、部活動練習・試合や他の進路行事（大学訪問等）との日程調整、および担当者の事前事後を含めた長期にわたる指導の負担も否めない。	・今年度までは商業科が実質的な担当としておこなってきたが、次年度以降、進路指導部が主担当に変わるのを機に、２年生時点で就職を考えている生徒に向けた行事に改変したいと考える。地域連携については、ビジネス探究科等での課題研究の中でも十分行っている。	進路指導
	31	地域および世界の課題解決のために、地元企業や世界の国々と連携して「課題研究」として調査研究活動に取り組むとともに、類型科目の授業においても地域と連携した活動を行う。		A		A	A	A	B	A	B	A	A	・本校生徒が取り組んだ課題研究内容から２チーム、コミュニティデザイン類型で取り組んできた「Makuake」の取り組みについて１チームが県の生徒研究発表大会に出場し、活動成果を十分に示すことができた。	・研究内容が１年の取り組みで完結するものばかりではないので、活動の継続をいかに行うかということが大きな課題である。また、生徒が行う活動に対して、資金の捻出に苦慮する場面が多くある。	・地域その他において、生徒の活動をバックアップしてくれるような基金や助成金の活用を取り入れる。北播磨県民局が行う「高校生ふるさと活性化事業」等に応募し、補助金の支援を受けることが出来た。今後もこういった助成金が有効活用していきたい。	ビジネス探究科
	32	「総合的な探究の時間」や「創造探究」において、サイエンスファシリテーターの活用や卒業生との連携、京都大学、神戸大学、兵庫教育大学や兵庫県立大学などとの高大連携により研究内容の充実を図る。	総合的な探究の時間 創造探究	A		B	B		A			B	B	・「創造探究」では研究が進んでいる班は外部コンテストで入賞するなど、優れた成果を上げることができた。また、探究心や粘り強く取り組む姿勢、プレゼンテーション能力などを育成することができた。 ・「総合的な探究の時間」では、昨年の取組を改善、発展させ、探究の能力と意欲を育成することができた。	・普通科の探究活動は、昨年までの年間計画の改善、改良を中心に、新たな取組を追加し実施した。その成果を検証し、それぞれの学年での取組を統合して、3年間を見通した指導計画として集約したい。 ・科学探究科での取組の成果を普通科の活動にも反映させたい。	・教員の間の探究に関する方法の共有、3年間を通した探究活動のスタンダードの作成などが求められる。	科学探究科